

『覚禅鈔』データベースの構築

On the establishment of a database for the *Kakuzensho*

森 由紀恵

Yukie Mori

奈良女子大学古代学学術研究センター, 奈良市北魚屋東町
Nara Women's University, Kita uoya nishi-mati, Nara, Nara

あらまし：日本中世成立期に編まれた真言宗小野流の教義書『覚禅鈔』は、政治史・外交史・美術史など多分野にわたる情報を含む歴史的資料として注目されている。本報告では、『大正新脩大藏経』図像部所収『覚禅鈔』データベース（年号・書名・図像）の意義と作成状況について報告する。また、データベース作成の結果明らかになった『覚禅鈔』の歴史的特色について示す。

Summary: The *Kakuzensho* was written for the establishment period in the Japanese Middle Ages. This book wrote down the creed of the Ono-ryu school, the historical facts of the political history or history of diplomacy or art history. Therefore the *Kakuzensho* is attracting attention to its historical document. In This paper, I report significance and making situation of a database for the *Kakuzensho* Chapter of iconography Sects of *Taisyō Shishū Daizō-kyō Sutra* (the era name, the book title, the iconographic Buddhist image name). And I examine historic characteristic of the *Kakuzensho*.

キーワード：日本中世史, 覚禅鈔, 密教, データベース

Keywords : Japanese medieval history, the *Kakuzensho*, esoteric Buddhism, database,

1. はじめに

1970年以降、日本中世宗教史は、中世国家の実態解明のために不可欠な分野で、政治史の重要な要素として認識されるようになった。黒田俊雄氏は¹⁾、中世社会では天皇が仏教的帝徳観によって権威づけられるなど、宗教一特に密教一が日本中世の国家機構を支えるイデオロギーとしての役割を果たしたことを指摘し、このような宗教的イデオロギーによって成立した日本中世独特の宗教のありかたを「顕密体制」と名づけた。以降「顕密体制」の実態解明や批判的継承が進むなかで、日本中世史の研究では、宗教的教義を記した書物である聖教²⁾の活用が不可欠になった。特に本報告で扱う『覚禅鈔』が編まれた院政期は、密教の教義の書面化および整理が

進展する時期であり、その後の中世社会で普及する日本特有の宗教的秩序が確立する時期³⁾でもあるため、聖教を歴史的資料として活用するための環境づくりが求められている。

このような研究状況の中、2007年より仏教聖典の一大叢書である『大正新脩大藏経』(以下『大藏経』)が、「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース」(以下SAT)としてWEB上で公開され、聖教活用の利便性が高まった⁴⁾。しかし、『覚禅鈔』は、テキストデータベースの対象外である『大藏経』「図像部」に所収されるため、データベースの対象外となっている。

本報告では、『覚禅鈔』の歴史的資料としての性格を概観することでデータベース構築の意義と具体的方法

を確認し、データベース構築の過程で明らかになった『覚禅鈔』の特色を示す。

2. 『覚禅鈔』の概略とデータベース構築の意義

(1) 『覚禅鈔』の構成と特色

①著者

『覚禅鈔』の著者覚禅(1143年～1213年ごろ)の出身は未詳である。少納言阿闍梨とも称されることから中下級貴族出身の僧侶と考えられている。真言宗小野流の勅修寺興然や醍醐寺勝賢の付法弟子で、19歳ごろより約30年間にわたって、後に『覚禅鈔』とよばれる聖教の蒐集・執筆にあたった⁵⁾。

②『覚禅鈔』の構成

12世紀後半に成立した『覚禅鈔』は、「百卷鈔」・「浄土院鈔」とも称され、140巻余りからなる。真言密教の尊法別百科事典ともいべき聖教で、刊本としては主に勅修寺本を底本とする『大藏經』136巻や、増上寺本を底本とする『大日本仏教全書』144巻などがある。

密教の修法(加持祈禱の法)別に成巻されており、その内容は、本書(具書とも。典拠となる經典名)・勤修記(実施の先例)・支度(道具類の記録)・壇図・図像(400葉ほど)・行法(儀礼の詳細な次第)・口伝・院宣(院司などが上皇や法皇の意をうけて発行する文書)・繪旨(藏人が天皇の命をうけて発行する文書)・御教書(三位以上の公卿または將軍の命をうけて発行する文書)・巻数(護符をかねた修法の実施報告書)・大陸の仏教書(『広清涼伝』など宋代仏教書・『隨願往生伝』など遼代仏教書)などからなる。

經典名およびその内容や修法の実践例、大陸の仏教書など、日本と大陸の宗教的教義に関係する情報だけでなく、院宣・繪旨・御教書など各修法を実施するにいたった政治的背景に関わる情報、修法に用いる仏・菩薩の図像など美術史に関係する情報など、『覚禅鈔』には日本および大陸の宗教史・政治史・美術史など多分野にわたる情報が含まれている。

③写本

『覚禅鈔』は、その重要性ゆえ、真言宗の諸寺院で書写が行われており、写本が多い。真言密教の主要寺院が集中する近畿周辺の寺院・諸機関が所蔵する勅修寺本・醍醐寺本・随心院本・東寺観智院本・高野山釈迦文院本のほか、関東や中部地方への真言密教の伝来過程の中で書写されたと考えられる金沢文庫本・千光寺本・万徳寺本・真福寺本などがある。

このように多くの写本が存在するが、覚禅自筆本の可能性があるのは、真福寺本『覚禅鈔』「如法尊勝法」のみで、『覚禅鈔』成立期の姿を完全に復元することは難しく、写本間の異同も多い。また、近年立正佼成会所蔵古香堂文庫本の「修法表白」巻が調査の結果『覚禅鈔』であったことが明らかになるなど⁶⁾、寺外に伝来する真言密教関係の尊法別聖教が『覚禅鈔』に該当すると判明する例もある。

『覚禅鈔』を歴史資料として利用する場合、『覚禅鈔』の写本間の異同を確認する作業が必須である。このような作業や新出の『覚禅鈔』を確認する際にも、写本の奥書を中心とした年号のデータが重要となる。

(2) 『覚禅鈔』書写の経緯と院政

密教関係の聖教は、師弟間での教義の授受を記録したものや、自派の関係諸寺院で書写した内容が中心であり、『覚禅鈔』の内容も覚禅の師である興然及び興然を通じた勅修寺諸師の伝や勅修寺浄土院・高野山東別所などの寺院での書写内容が中心である。しかし、この他にも、壇所(密教の修法を行う壇を設け聖教の保管や閲覧の場所でもあった)とよばれる場で書写された記録がみられる。「六条坊門富小路壇所」・「綾小路壇所」・「鳥羽壇所」・「新院壇所」やこれに類似する施設として「法住寺内裏」・「六条内裏」・「六条殿」などがあり、白河院や鳥羽院が造営した鳥羽殿に存在したと考えられる「鳥羽壇所」や、「新院壇所」など院御所に設けられたものや、内裏に設けられたものが確認できる。このような『覚禅鈔』書写の経緯には、中世成立期(11世紀～12世紀ごろ)の政治形態である院政との関係が示されているとの指摘がある。

中野玄三氏は⁷⁾、中世成立期には、宗派が独立して行う修法が存在する一方、強力な院の命令によって各宗派が合同して修法を行う場合が増加していたことから、「広沢流に対抗し、小野流の高僧が院や天皇に懇請して法住寺殿・六条殿・白川殿・鳥羽離宮などの壇所にある各宗派の秘法を覚禪に閲覧させるよう努めた」とされた。また、専制政治を行った院が教義・行法そのものへ介入しはじめたことを指摘された上川通夫氏⁸⁾は、壇所の分析を通じて『覚禪鈔』は院の近臣僧ともいべき小野流の高僧や院による宝蔵・壇所の開放によって成立した「真言宗小野流必備のマニュアル」とされている。

『覚禪鈔』に記されている教義が真言宗小野流にとどまらず、真言宗の他派や天台宗、大陸の仏教教義など多分野にわたるのは、以上のような政治的背景を反映するものと考えられ、『覚禪鈔』には、当該期の宗教統合の核であった院の周辺に蓄積された情報が集積されている可能性がある。このような傾向を分析するためには、覚禪が参照した書名のデータベース化が必要といえる。

(3) 『覚禪鈔』収録の図像の特色

上述のような歴史学的考察に先行し、1960年代に『覚禪鈔』は図像集としての研究がすすめられていた。佐和隆研氏⁹⁾によると、密教では師弟間の修法などの授受の際、その修法の本尊を表した白描図が授受された。11世紀には師弟以外のものたちがこれらの白描図を書写するようになり、12世紀にはいと、図像集の編纂が本格化し、図像集を編纂することが目的化していたことが指摘されており、その代表例として『覚禪鈔』があげられている。このような佐和氏の指摘は、『覚禪鈔』が師弟間での密教教義の伝授に加え、院の後ろ盾や情報提供のもとに編纂された状況と合致する。

『覚禪鈔』には図像が400葉ほど収録されているが、これらの図像情報には、院の周辺を取り巻く宗教的な秩序が反映されていると考えられ、図像のデータベース化もあわせて行う必要がある。

3. データベースの概要

以上、『覚禪鈔』の概要を確認する中で、年号・書名・図像のデータベース化の意義について述べた。次に、デ

【資料1】①年号データベース（一部）

年号 データ	所見	大蔵 巻数	巻数	巻名	頁	段	備考
11900000	建久年中	4	1	両部大日	390	1	建久
174000905	元文五庚申年九月五日	4	1	両部大日	392	3	元文5年9月5日
115400000	久寿年中	4	2	仏眼	398	2	久寿
118700300	文治三年三月頃	4	2	仏眼	398	2	文治3年3月
000000000	年月日	4	2	仏眼	398	2	
000000000	月日	4	2	仏眼	398	3	
113600208	保延二年二月八日	4	2	仏眼	398	3	保延2年2月8日
089300926	寛平五年九月二十六日	4	2	仏眼	403	3	寛平5年9月26日
112000000	保安	4	2	仏眼	406	1	保安

データベースの具体的な作業内容について確認していきたい。

(1) データの抽出

データベース化の対象は、古写本(鎌倉期)と考えられる勸修寺本中心に活字化された『大藏経』所収の『覚禅鈔』とした。年号(年月日)・書名・図像の情報を抽出し、Excelにて情報を入力した。情報件数は18000件ほどである。

(2) データの整理・公開方法

現在、これらのデータを索引形式で整理しているが、索引は、①年号、②書名、③図像の3種類を作成している。

①年号については、年代順に整理して公開することを考慮し、年号データ(西暦(4桁)月(3桁)日(2桁)の計9桁の算用数字)・所見・大藏経巻数・覚禅鈔巻数・覚禅鈔巻名・頁・段・備考の8項目で整理している【資料1】。紙媒体で公表する際には、年号データの昇順で並べ替えて公表する予定である。

②書名については、所見・大藏経巻数・覚禅鈔巻数・覚禅鈔巻名・頁・段・備考の7項目で整理し、所見の漢字(『大藏経』は正字で活字化されているが、多様な形式での公開の可能性をふまえて新字体で入力)の順番で並べ替える予定である。当初、異なる所見で表記される情報でも同一書をさす事例があるため、各書の内容を『大藏経』・『真言宗全書』などと対比しながら、できうる限り書名を統一する作業を行っていた。例えば所見「聚秘鈔」・「勸修寺法務抄」・「法務御抄」・「勸修寺抄」などは、すべて寛信の著作「類秘抄」に該当する¹⁰⁾。このため、所見「聚秘鈔」以下3点はすべて「類秘抄」であることを示す項目をたてていた。しかし、このような書名の特定作業を正確に行うことそのものが、データベースを活用した調査・研究に該当すると考えられるため、まずは上記の7項目のデータを入力することとした。

③図像については、所見・大藏経巻数・覚禅鈔巻数・覚禅鈔巻名・頁・段の6項目で入力を開始したが、写本間の異同が確認しやすいという特色がある点をふまえ

て、千光寺本・増上寺本(『大日本仏教全書』所収)の写本との比較ができるようデータ入力作業を開始した。現在、Excelにて文字情報のみを入力しているが、画像データを組み込む必要性を感じる。具体的な方法については現在検討中である。

(3) 索引形式のデータベースの意味

本研究では、SATにならう形での『覚禅鈔』のフルテキスト化を試みた。しかし、OCRによるフルテキスト化には、時間的な意味で限界がある。

現在使用しているソフトは、縦書き・第二水準の新字体に対応するとされている「読取革命」VERSION15であるが、『大藏経』所収『覚禅鈔』は正字で記載され、JISコードに存在しない字体や梵字、割注・返り点などが記載されているという特質上、正しく変換される精度が低い。現在、約2099字の2頁分をフルテキスト化するために約90分かかり、若干作業効率が向上してはいるものの、全1236頁の『大正藏』所収『覚禅鈔』フルテキストデータ化及びデータベースを用いての研究にいたるまでには時間がかかる。

一方、索引形式でのデータベース化では、データ抽出作業の過程そのものが『覚禅鈔』の特色の分析につながる。ここでは、その一例として、『覚禅鈔』「七仏薬師」の例を提示してみたい。

七仏薬師法とは、天台四箇大法の一つで、「東寺流七仏薬師・尊皇王・金剛童子・熾盛光法等雖有、応勅請事山門・寺門之輩也」¹¹⁾とあるように、東寺流つまり真言宗にも伝来するが、朝廷などの公請に応じるのは延暦寺や園城寺など天台宗の僧侶であるとされる修法である。この巻で抽出した書名は以下の通りである。

- ①入唐八家：智證大師(円珍)御記・慈覚大師(円仁)御
- ②天台宗：叡山長宴僧都云・四十帖口決(皇慶口伝)・
妙高院法印勸修記
- ③真言宗小野流：相伝之慈恵記(亮恵)
- ④真言宗広沢流：成就院云・成就云(寛助)・大室伝(性
信)匡房(大江匡房)卿撰・恵什闍梨記(恵什¹²⁾)
- ⑤その他：安養抄・感心録ほか

【資料2】『七仏薬師』『覚禅鈔』（『大正蔵』図像部4巻59頁）

南岳法門傳下云釋智瑋清滯人俗姓張氏普永嘉遷居臨海祖先秀梁倉部侍郎臨海內處父文環陳中兵將軍瑋自小言行無怙親隣奇之年十七父母俱喪瑋因累年說疾醫藥無効因靜夜策杖至庭中向月而臥專心念月光菩薩願慈悲救護如此數夜而無散亂忽於夢中見一人形色甚異從東方來謂瑋曰我今故來爲治汝病便以口遍瑋身吸朔日而漸差云義淨三藏傳云帝尊真皇帝以昔居房部幽尼無歸所念藥師遂蒙降禮駕慈澤重關洪猷因命法徒更令翻譯於大内佛光殿譯成二卷自佛光殿手

續高僧傳三十云釋眞觀字聖達吳郡錢唐人俗姓范代祖匠丞給事薰內侍郎父先通眞散騎常侍母恒氏溫良有德嘗憐憤無胤潔齋誓誦藥師觀音金剛般若願求智子○依藥師經七日用法於三夕覺遊光照身因餘心性非恒言輒訟達豈非天託人寄范弘釋者也及甚誕育奇相不倫左掌仙文右掌人字從幼至終未嘗病調○雖老不衰云云

弘教類聚古稱大云云餘年三十有六之時稍煩身病○即余參藥師寺敬禮藥師丈六瑞像而申云依余身病老母悉苦伏願欲痊○至七日夜夢見自天降下短籍一枚長一尺許即余持取其籍而見者記云七八八九九年實是雖知余命之遺數而猶或七八八九兩時空上教云四十年哉○今余至七十有六云云

已上感應緣其說繁多可見三卷疏等

【資料3】『行林抄』第三（『大正蔵』第76巻29～30頁）

瑠光佛云云
南岳法門傳下云釋智瑋清滯人俗姓張氏普永嘉遷居臨海祖先秀梁倉部侍郎臨海內處父文環陳中兵將軍瑋自小言行無怙親隣奇之年十七父母俱亡瑋因累年說疾醫藥無効因靜夜策杖至庭中向月而臥專心念月光菩薩願慈悲救護如此數夜而無散亂忽於夢中見一人形色甚異從東方來謂瑋曰我今故來爲治汝病便以口遍瑋身吸朔日而漸差云云

義淨三藏傳云帝尊真皇帝以昔居房部幽尼無歸所念藥師遂蒙降禮駕慈澤重關洪猷因命法徒更令翻譯於大内佛光殿譯成二卷自佛光殿手

續高僧傳三十云釋眞觀字聖達吳郡錢唐人俗姓范代祖匠丞給事薰內侍郎父先通眞散騎常侍母恒氏溫良有德嘗憐憤無胤潔齋誓誦藥師觀音金剛般若願求智子○依藥師經七日用法於三夕覺遊光照身因餘心性非恒言輒訟達豈非天託人寄范弘釋者也及甚誕育奇相不倫左掌仙文右掌人字從幼至終未嘗病調○雖老不衰云云

弘教類聚古稱大云云餘年三十有六之時稍煩身病○即余參藥師寺敬禮藥師丈六瑞像而申云依余身病老母悉苦伏願欲痊○至七日夜夢見自天降下短籍一枚長一尺許即余持取其籍而見者記云七八八九九年實是雖知余命之遺數而猶或七八八九兩時空上教云四十年哉○今余至七十有六云云

已上感應緣其說繁多可見三卷疏等

御修法所

他巻に比して①・②の天台系の經典が多く含まれている点が特色であるが、分析の結果、⑤「感応録」の引用については次のような特色があることが判明した。

【資料2】は『覚禅鈔』『七仏薬師』の「感応録」引用部である。この引用部を【資料3】天台宗法漫流静然著『行林抄』と比較すると、両本の異なる点は字の異同のみで、末尾の注記までが同じである。

『覚禅鈔』『七仏薬師』の成立は、奥書によると文治5(1189)年で、『行林抄』の成立が仁平4(1154)年³⁾であるため、両書の成立はほぼ同時期といえる。そして、【資料2】『覚禅鈔』には『行林抄』と明記されていないことから、宗派の異なる著者からなる『行林抄』と『覚禅鈔』の底本が同じである可能性がうかがえる。

『覚禅鈔』と『行林抄』のこのような関係は、『覚禅鈔』『薬師』『尊勝下』などでも確認することができることから、両書の関係の分析は『覚禅鈔』成立の背景を

考える上での重要な情報といえ、そこには当該期諸宗派の統合の核となった院の関与を想定することができる

と考える。以上の情報は、『覚禅鈔』の書名を抽出・確認する作業の中で見いだせたもので、索引形式でのデータベースの構築の作成や活用が、『覚禅鈔』成立の背景の分析につながることを示しているといえる。

4. おわりに

『覚禅鈔』データベースの構築の意義と具体的方法について述べた。データベースはフルテキスト化及び図像のデータ化を視野に入れつつも、当面は紙媒体の索引形式で整理・公開する予定である。

このような索引形式でのデータベースを作成・活用することで、従来明らかにされていなかった『覚禅鈔』の特色を示すことができた。『覚禅鈔』は真言密教小野流

の尊法別百科事典と評価されている。しかし、『覚禪鈔』の引用経典を具体的に分析していくと、天台宗の聖教と共通の情報を引用しつつ編纂されていることが判明する。『覚禪鈔』は小野流の僧侶覚禪の手になるとはいえ、その内容には小野流にとどまらない宗派をこえた知の集積の反映であるという実態が具体的にみてとれる。

今後は、3種類の索引を作成しつつ『覚禪鈔』の特色についての分析を深めたい。また、画像索引の画像データの処理の方法、フルテキストデータの構築とその活用方法などについて検討していきたい。

付記

本研究は平成 26 年度～平成 28 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))、研究代表者:森、課題番号:26370766の成果の一部である。

注

- 1) 黒田俊雄「顕密体制の展開」『日本中世の国家と宗教』岩波書店 1975年。
- 2) 聖教とは、寺院社会内で作成された教義・行法に関する記録で、僧尼の修学や宗教活動の実践に際して活用された。聖教は師弟間で原本授受や書写伝受が行われ、法脈継承の根拠ともなった(上川通夫「中世聖教史料論の試み」『史林』79-3号 1996年)。
- 3) 例えば、12世紀には仏教的価値体系の頂点にある大日如来と神祇的価値体系の頂点にある天照大神の本地垂迹説が成立し、その教義が『天照大神儀軌』などの聖教から明らかになる(森由紀恵「中世の神仏と国土観」『ヒストリア』183 大阪歴史学会 2003年)。
- 4) 『大蔵経』のデータベースについては永崎研宣「大蔵経の歴史と現在」『新アジア仏教史 15 日本V 現代仏教の可能性』佼成出版社、2011年。SATのHPは<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>。
- 5) 以下、『覚禪鈔』の概要については、中野玄三「覚禪伝の諸問題」『仏教芸術』70号 1969年、上川通

夫「密教文献と中世史—『覚禪鈔』をめぐる—」『歴史科学』186号 2006年によった。

- 6) 藤原重雄「校成図書文書館所蔵勸修寺大経蔵本『覚禪鈔』修法表白—影印—解題—」『勸修寺論輯』8 2008年。
- 7) 中野玄三氏前掲論文。
- 8) 上川通夫「院政と真言密教」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社 1998年。
- 9) 佐和隆研「密教における白描画像の歴史」『仏教芸術』70号 1969年。
- 10) 川村知行「寛信の類秘抄と類聚抄—覚禪抄の引用をめぐる—」『密教図像』3号 1984年。
- 11) 『追記』(『大正蔵』第78巻)。
- 12) 恵什は広沢流から小野流に流派を変更している。
- 13) 『仏書解説大辞典』。